世田谷村日記

石山修武

十月十五日

今日は目白の自由学園に行く用事がある。十二時前、自由学園、研究室卒業生の結婚式。こういう会はできるだけ避けているのだが、新郎新婦二人共、研究室出身というのだから、仲々逃げられぬ。私の気の弱いところだ。しかも、良い会であった。典型的に俗な風もあったけれど、それはそれで本人達の品格なんだから、仕方ない。関岡英之に会えたのは収穫であった。関岡はＫＥＩＯ大学卒後、東京銀行。北京支店勤務、その後、何故か知らぬが、早大夜間の専門学校に来て、私の昼の学部授業を聴講、提出させたレポートが飛び抜けて素晴らしくて、私が独断で、大学院にスカウト。これは、彼の人生にとってはどうだったか知る由も無いが、私の先生稼業では数少ないヒットであったのではないかと実ワ自負している。関岡君はその後、いきなり書き手として蓮如賞受賞。もの書きの径に入った。研究室ＯＢとしては森川Ｋと双璧の書き手で、むしろ森川Ｋよりも視野はズッーと広い。しかし、銀行員であったからなのか、少々、守りの姿勢が強過ぎて、一歩踏み出さぬところがあった。つまり、他の通常の学生とは全く異なる水準なのだが、言ってみれば気の弱いところがあった。ところが、今は、「拒否できない日本」という本まで書き、本格的な書き手として成長している。夏の選挙では、あの大失敗してしまった、小林興起を応援して、何か文章に書いてしまう様な愚も犯し、その辺りの中期戦略的勘に大きな問題があるのだが、これは他人の事は言えぬ。私だって失敗だらけだ。関岡君は世界を視ようとしているのだが、自分の実人生とそれが結びついていないだけだ。馬鹿だらけの若い奴らは視ようともしない。何も視ない、考えない、馬鹿がとり敢えずは今の経済社会では便利な部品だからだ。マ、そんな事はともかく、長い長い結婚式を終えて、関岡君と少し話したくて。二店ハシゴした。十七時過目白駅で別れる。彼は上野でオペラ鑑賞との事。いいんじゃないですか。人生楽しんで下さい。十八時頃世田谷村に辿り着く。

十月十六日　日曜日

二〇時、宗柳で山田脩二と会食。考える事多々あり、カバーコラム「山田脩二展」書く。山田脩二の尻をたたくのは、実は自分で自分の尻をたたくのに等しいのだ。

十月十七日

今日は昼から軽井沢の現場へ。朝、思い立って、昨夜書いた「山田脩二展」大巾に書き直し、手を入れる。題目も変えた。酒仙山田脩二。

十二時過氷川台Ｓ氏宅。車で軽井沢へ。石井同行。竣工検査。十七時過迄。十八時四〇分の高速バスで東京へ戻る。バスの中で石井と少しばかり話す。二〇時三〇分池袋着。二十二時前世田谷村に戻る。写真は真冬にならぬと撮れぬな。樹で何も見えない。